

〔論 説〕

資本主義とそのオルタナティブをめぐる主要論点 ——伊藤誠著『入門 資本主義経済』を手かりに——

塚 本 恭 章

Abstract

In this paper, we consider Makoto Itoh's new book, *Introduction to Capitalist Economy* (published in 2018) from the viewpoint of the limits of Neoliberalism (Neoliberalism Capitalism) and new possibilities of 21st socialism. We also have to explore the significances and trends of Japanese Capitalism. How can the economy theory of capitalism be used for the political economy of socialism? Political economy as a social science (Marxian, neoclassical, Keynesian and Austrian, and so on) is now facing the following very important theoretical and practical problems, 1) What is Capitalism? 2) Whither Capitalism? , and 3) What are the new alternatives to Neoliberalism?

Economic theory and the thought of the rivalrous schools is revised deeply and widely through an intellectual controversy between diverse generations. We will have to address a fresh message for younger generation who learn Economics at University now or will learn in near future. A future for the history of economic thought and theory will be changed by collective efforts of many social scientists.

<目次構成>

0. はじめに
1. 資本主義についての新書
2. 新自由主義的資本主義の限界
 - (1) 歴史の歩みを大きく逆流させた新自由主義
 - (2) 日本資本主義の世界史的意義とその潜勢力
3. 資本主義のなにをどうのりこえるのか
 - (1) 社会主義復権への心理的抵抗？
 - (2) 唯物史観の補整と社会主義
 - (3) 21世紀型社会主義のコア
4. 主流派経済学にはない資本主義論
 - (1) マルクス経済理論の優位性
 - (2) 主流派にはない3つの側面
5. 経済学史の未来にむけて
6. 経済学を学ぶ若い世代へ
7. おわりに

0. はじめに

社会科学としての経済学は、資本主義経済の自己認識の歩みを体系的に理解することから開始した学問であり、経済学の多様な競合的諸学派は関心の大小や濃淡の差こそあれ、<資本主義>をいわば共通論題としているとあってよいであろう。その資本主義をめぐる、ここ数年「終焉/限界」論を説く学術書が相次いで刊行され、大きな関心を集めてきている（水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』、『閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済』2014年、2017年、W・シュトレーク『資本主義はどう終わるのか』、D・ハーヴェイ『資本主義の終焉』、G・ドスタレールとB・マリス『資本主義と死の欲動』、若森章孝・植村邦彦『壊

れゆく資本主義をどう生きるか』、そして伊藤誠『資本主義の限界とオルタナティブ』など、すべて刊行年は2017年)¹。

あらためて「資本主義はどこへ向かうのか、そして向かおうとしているのか」という壮大で魅力的なテーマを考え直すうえでとりわけ有意義なことは、「資本主義とはなにか」という根本問題に立ち返ることではないか。それなくして、歴史の未来の進路への確かな展望を切り拓くことはできない。そこで、伊藤誠氏の最新書『入門 資本主義経済』（平凡社新書、2018年）を手がかりとし、「資本主義」をめぐる知的探究の旅に出かけよう。それはまた、社会科学としての経済学のあり方とゆくえをも見据えるものとなるに違いない。本書にはそのための数多くの重要な学問的考察と洞察が提示されている。全6章構成の本書は、氏の全6巻の著作集を一書に凝縮した作品ともいえよう。本稿は、当該新書の内容を網羅的にカバーした「書評」というより、わたくしの問題関心に即して本書を比較的自由に読み進めながら、本稿テーマ「資本主義とそのオルタナティブ」をめぐる主要論点を抽出・再構成した「論説」という形式をとることとした（本稿の第6節において、著者との交流を回顧した自分史についてもあえて触れており、その点では「教育研究」という側面も含まれていよう）²。「書評」としての当該新書の正確な内容紹介や批評・展望的課題についての作業は別稿を期したい。

周知のように、昨年2017年は、マルクス『資本論』（第1巻の1867年）刊行から150年、ロシア革命100年の記念碑的な年であった。そして本年2018年は、

1 たとえば『at プラス』01号（2009年8月）は、リーマン・ショックの2008年の世界金融危機がもたらした世界経済の縮小という事態をうけ、「資本主義の限界と経済学の限界」という特集を組み、岩井克人氏や水野和夫氏らの（インタビューにもとづく）論稿が所収されている。ドスタレールとマリスによる共著『資本主義と死の欲動』の訳者の齊藤日出治 [2018] もすぐれた概観的総括と展望を提示している。

2 本稿は、伊藤誠氏の『入門 資本主義経済』の刊行を機に、「週刊読書人」誌上において「資本主義はのりこえられるか」というテーマをめぐる氏のとの「対談」用準備論文として元々は書き上げられたものである。伊藤氏とわたくしとの対談は2018年3月29日におこなわれ、その対談内容は「週刊読書人」2018年4月20日号1・2面（第3236号）に掲載されている。当該新書とあわせ、お読みいただきたい。

マルクス生誕200年、明治維新から150年、そしてリーマン・ショックから10年目の年にあたる。「資本主義」そのものを広く深く問い直し、考え直す時機を得た年といえよう（なお当該テーマをめぐる最新の抽稿として、「資本主義をめぐる思想と理論を問い直す—新自由主義とグローバル化に対抗するオルタナティブへ」『現代思想』青土社、2018年4月号、162-173頁がある）³。

1. 資本主義についての新書

全6巻に及ぶ集大成としての『伊藤誠著作集』（社会評論社）が2012年に完結した後、ここ数年に限ってみても、伊藤氏は、『マルクス経済学の方法と現代世界』（桜井書店、2016年）および『資本主義の限界とオルタナティブ』（岩波書店、2017年）という2冊の専門書を相次いで刊行された。とくに後者は、表題の「限界」という言葉に象徴されるように、1980年代以降の新自由主義的グローバル資本主義が日本をふくむ世界経済にもたらしてきた多方面に及ぶ深刻な社会的影響・災厄を総括し、新たなオルタナティブを学問的・実践的に探究することが喫緊の挑戦課題をなすことがこれまで以上に強調されている。

今回刊行された『入門 資本主義経済』は、平凡社新書3冊目（『日本経済はなぜ衰退したのか—再生への道を探る』2013年、『経済学からなにを学ぶか—その500年の歩み』2015年）に該当する作品である。いわゆるテキスト（教科書）としては30年近く前の『資本主義経済の理論』（岩波書店、1989年）があるが、それが資本主義経済の基礎理論を体系的に解説することに特化されていたのと異なり、当該新書は、資本主義経済の原理にとどまらず、資本主義の歴史的発展段階や日本資本主義をふくむ現代資本主義の動態と変容・位相、そして資本主義をのりこえる社会主義の新たな可能性についても明快な概観と積極的な考察が及ぼされている。先の2冊の新書と異なり、副題のないシンブ

3 関連文献として西部 [2011] [2017]、塚本 [2017] も参照されたい。伊藤誠氏を含む経済学者4人による「資本主義」をめぐる鼎談（2015年）も有益である。

るなタイトルが示唆するように、「資本主義」経済をめぐるそうした多岐に及ぶ多面的な問題群を一書に集約し概説する仕上がりとなっている。その意味で、「入門」という言葉には、著者自身の既存作品において「これまでに類のない」という含みもあるのかもしれない。

冒頭「はじめに」のなかで、氏は「資本主義を主題とする考察は、人類史の総体をふりかえり、未来を問う、まさにワクワクするほど雄大な視野を求められる」（10頁；以下、とくに断りのない限り当該新書の頁数）と述べている。多くの「謎」や「逆説」（あるいは「闇」⁴という側面もあるであろう）を本来的にもつ社会機構としての資本主義について多面的に考え学ぶことは、その意味でもきわめてスリリングで興味深い考察課題をなしている。マルクス経済学の理論家としてこれまで数多くの著書を世に問うてきた著者だが、当該新書は、あらためて学問の初心と原点に著者自身、そしてわれわれをも回帰させるような新鮮な迫力に富んでいる。「経済学を学ぶ」ことは「資本主義を学ぶ」とと表裏一体の関係にあることが強く実感できることであろう。

2. 新自由主義的資本主義の限界

(1) 歴史の歩みを大きく逆流させた新自由主義

当該新書の論調においてとりわけ着眼すべきは、冒頭「はじめに」にて述べ

4 前作『欲望の資本主義—ルールが変わる時』（2017年）の続編『欲望の資本主義2—闇の力が目覚める時』（東洋経済新報社、2018年5月）。本書については同紀要同号に掲載されているわたくしの研究ノートを参照のこと（当該著書のもとになっている番組それぞれ自体を視聴するのがやはりもっともよいであろう。拡大する格差・不平等の弊害からイノベーションの呪縛、人間の貨幣愛、世界経済の分断、成長資本主義の終焉など、幅広い現代的な問題群が周到に扱われており実に興味深い）。前編も続編もそこに付された「副題」が世界経済の動向を読み解くキーになっている。当該著書は年始の2018年1月3日NHK・BS1にて初回放送されたドキュメンタリー番組を編纂し単行本化したものである。そこでは、欲望の〈資本主義〉をめぐるマルクスやシュンペーター、ケインズといった偉人らの言説や思想を効果的に活用する番組編成になっており、われわれが直面し続ける現代的問題の意義を如実に示していた。

られている次の文章であろう。すなわち、「アメリカを震源地としたサブプライム世界恐慌後に、先進諸国に広がる連続的な危機のなかで、このところ資本主義の終焉論が話題になっている」（11頁）と指摘しながら、「本書は、日本をふくむ先進諸国には、これに近い限界が露呈されつつあるとみている」（同頁）というスタンスである。当該新書の第4章第3・4節や第5章第4節などにおいて、その理論的・現実的根拠が詳細に解説されている。本書は、昨今の資本主義「限界」論ないしは「終焉」論に基本的に賛同し、「終焉論を補完する」（12頁）意味をふくめて、資本主義をのりこえ、それに代替しうる21世紀型社会主義などのオルタナティブを多元的に描き出す試みをもって締め括られている（この観点にもっとも関心のある読者はあえて終章の第6章から読み進めてもよいだろう）。大恐慌後のニューディール以降の支配的教義だったケインズ主義的福祉国家・社会民主主義に代わって、1980年代に先進資本主義諸国の新たな政策基調となった新自由主義とそれにもとづく新自由主義的グローバル資本主義の「限界」ないしは「終焉」を明確に念頭に置いて執筆された書、この点こそこれまででない「入門」書としての大きな特徴があるものと考えられる。

かつての専門的な諸作品である『幻滅の資本主義』（大月書店、2006年）、『サブプライムから世界恐慌へ—新自由主義の終焉とこれからの世界』（青土社、2009年）、『日本経済はなぜ衰退したのか—「再生」への道を探る』（平凡社新書、2013年）、昨年の『資本主義の限界とオルタナティブ』（岩波書店、2017年）などが、当該新書に貫き流れる問題意識と響き合うことはむろんいうまでもないであろう。

本書によれば、1) 民営化、2) 緊縮財政、そして3) 社会的諸規制の撤廃と規制改革の推進を主要な経済政策の三面とする新自由主義は、その政策基調をいわば経済的下部構造から堅調に支えうる高度情報通信技術（ICT）の普及と高度化との適合性をも介しており、「経済思想や経済理論の交替のみに由来するものとはいえない」（168頁）。そしてそれは、「歴史の歩みを大きく反転、逆流させた」（同頁）と明確に総括されている。新自由主義路線が本来の政策理

念と現実的政策とのあいだに根本的な矛盾を抱えるものであり、「新自由主義的な雇用関係の個人主義的再編」(171頁)にともなう雇用形態の弾力性とそれにとともなう不安定性、雇用の身分化(森岡孝二)⁵は、四割近い非正規雇用(派遣・契約社員、パート、アルバイト)を激増させ、働く労働者の生活不安と将来不安を持続的に助長している。多方面に及びうる格差再拡大や新たな貧困問題も深刻さを増してきている。晩婚化・シングルの増加や生涯未婚率の長期的な増加趨勢も鑑みれば、「社会の基礎となる人口を減少させないことは、あらゆる社会形態をつうじる経済生活の原則ではなかろうか。日本をはじめ先進諸国の多くでは、この経済原則が毀損されているのである」(179頁)という指摘はきわめて傾聴に値するものと考えられよう。それゆえ資本主義的人口法則は、マルサス的な自然法則論として理解すべきではなく、かつてマルクスが挑んだように、「資本主義の動態の変遷と関連した特殊な歴史的転換として解明されなければならない」(180頁)。さらにまた新自由主義的資本主義は、金融面での規制緩和をも顕著に推進する実践的帰結として、いわゆる「金融化資本主義」としての特徴を有するものへと大きく変貌を遂げ、投機的バブルや通貨・金融危機をリレー反復的に絶えず引き起こす事態を生じさせてきている。2008年のサブプライム世界金融恐慌はその終局的現象にほかならない。労働・雇用面と金融(貨幣)面でのこうした新自由主義的経済政策の社会的災厄・費用は甚大であり、それゆえ氏はかつての書で、「新自由主義の負うべき責任は重い」と断定されたわけである。

上記以外にも重要な論拠はあるのだが、こうした新自由主義的グローバル資本主義のなかで顕著に生じてきている事態を総合的かつ客観的に分析しながら、本書では明確にその「限界」ないしは「終焉」が強調されている(ただ本書では、ことに「限界」という言葉が用いられ、「終焉」という表現にはいさ

5 森岡[2015]に詳しい。「雇用身分」という概念は必ずしもまだ一般的な受容性を得たものではないと思われるが、現代的な「雇用」形態の特質を象徴的に捉えているのではないだろうか。これまでの森岡の研究動向もあらためて注目されるであろう。

さか慎重な姿勢も垣間みえる。以前の書で「新自由主義の終焉」という副題があったが、新自由主義政策路線を基調とする新自由主義的「資本主義の終焉」と同義なのか。冒頭で言及しておいたように、氏以外にも「資本主義の限界/終焉」論を説く学術書が2017年以降に相次いで刊行されてきている。なぜいまなのか、そしてそうした世界史的な問題状況はいったいなにを意味するのか、論者によって見解も多種多彩で、現時点では必ずしも一義的な論拠をなしていないように思われる。ただ、そこにあるコアメッセージはきわめて鮮烈で合致している。こうした一連の問題状況をふまえ、「新自由主義の成果と限界」ないしは「新自由主義的資本主義の限界」をめぐる、あらためて精察を積み重ねていくことがより強く求められている。

(2) 日本資本主義の世界史的意義とその潜勢力

上記とも密接に関連する内容として指摘されるべき別の論点は、新自由主義はとりわけ「日本経済」や「日本資本主義」にどのような影響をもたらしているのだろうか、というものである。

氏は日本経済や日本資本主義についての著書・論文も多く、一般読者にとって、「日本はこれからどうなっていくのか」という問題こそ最大の関心事といえるかもしれないのであり、それは老若男女を問わずそうかもしれない。ゆえにとりわけ着眼しておきたいのは、「資本主義は共同体の分解作用の過度の成功から、逆説的に、その社会的基盤の破壊と衰退を生じさせているといえるのではなからうか」（180頁）という見識にあるように、ICTを中心とする物質的基盤をつうじての個人主義的消費・労働市場のグローバルな相互促進的深化作用が、企業中心社会としての日本資本主義において「ある意味で成功してきている」（233頁）ことが、その反作用と逆説の双方をとまなべて、多様な連動的危機構造と著しい衰退傾向—超少子化や急速な高齢化、産業空洞化や格差・貧困問題の深化拡大など—をもたらしているという、きわめて困難で根の深い問題にほかならない。新自由主義がもたらしてきた「ある種の成功」によっ

て危機克服をより困難化する様相は、新自由主義の強靱な生命力を強く想起させるところである（世界史的にみても、たとえばナオミ・クラインが「惨事便乗型資本主義」と命名した市場原理主義的な新自由主義政策は、民主主義ではなく軍事独裁勢力との連携をつうじてくりかえし姿態を変転させながら存続してきた。安倍内閣が推進するアベノミクスはケインズ主義と新自由主義という2つの相反するイデオロギーを混在した政策であるにもかかわらず、昨年10月の衆議院議員総選挙では野党勢力の弱体化・分散化とも相まって、国民から結果的に支持されてしまうという事態とも無関係ではない）。

著者は日本資本主義が抱える多重危機を総括して、それらは「自由で競争的な市場の秩序にゆだねる新自由主義のもとで、営利企業を中心とする資本主義社会に内在する労働力の商品化の無理が、社会生活の相互扶助的な協同性や平等性を破壊してゆく『自由』を、現代的な文脈において、あらためて明示しているのではなかろうか」（230頁）というきわめて含蓄に富む見解を提示しながら、近代資本主義の理念（自由、平等、人権ないしは友愛）とその現実とのあいだに拮据する大きな乖離と矛盾に対して強い懸念を表明している。しかしまた他方で、日本はことに戦後の高度成長期にかけて「後発的資本主義化の挑戦」を果敢に体験しながら、1980年代に「ジャパン・アズ・ナンバーワン」（E・ヴォーゲル）と賛辞される時期もあったように、日本資本主義の歴史的動態の軌跡は、「むしろいまや先進諸国における資本主義的な発展とその現代的な限界を、明治維新後150年の発展と衰退の史実をつうじ、いわば結晶のように凝縮されたモデルとして明示しているともいえるのではなかろうか」（239-240頁）とも述べ、「課題（限界）先進国」日本としての世界史的意義にも注視されている。こうした新自由主義的日本資本主義についての理解と省察を深めることも欠かせないであろう。

3. 資本主義のなにをどうのりこえるのか

資本主義に代替しうるオルタナティブとしての社会主義の思想と理論も、きわめて奥行きのある今なお魅力的なテーマであり、本書では終章の第6章「資本主義はのりこえられるか」において、理論的・現実的論拠など多面的な観点から考察されている。『伊藤誠著作集』の第6巻目は『市場経済と社会主義』であり、当該問題は経済理論と経済思想の次元のみでは解きえない側面をたぶん有しており、未来にむけてより多くの〈集合的努力〉が必要ではないかと考えられる。資本主義市場経済を予定調和的な自然的自由の経済秩序とみなしていた古典派経済学とそれに続く新古典派経済学、あるいは政府の経済政策にもとづく修正資本主義を標榜するケインズ派経済学からはけっして内発的に生じえないテーマが「社会主義」であり、それは「マルクスの経済学」によってこそその学問的根拠をあきらかにすることができる。ミーゼスやハイエクらオーストリア学派による一連の社会主義計画経済、市場社会主義への批判的論拠も現代的意義をもつところであり、それへの応答も社会主義の新たな可能性を探究するうえで重要な作業を担っている。

(1) 社会主義復権への心理的抵抗？

新自由主義的資本主義に内在する根本的限界を突破することがあらためて強く求められているという現代世界における問題状況があることはいうまでもなく、それゆえ資本主義の「限界」論ないしは「終焉」論と社会主義の新たな可能性をふくむ広義の「オルタナティブ」論はセットであり、「限界/終焉」論を説く以上、それをのりこえていく社会経済システムの展望を探究することは欠かせない作業である。そしてそれと明確に対峙するためには、新自由主義的な「資本主義の危機」にとどまらず、ソ連型社会主義の崩壊に象徴される「社会主義の危機」についての包括的な学問的反省もまた問われよう。氏のいう「双対的」危機である（伊藤 [2016]）。ただ現時点においても、「社会主義の崩壊」

という歴史的事実のほうがはるかに重く、資本主義の「限界/終焉」論から直截的に「社会主義の新たな可能性」を模索することに対し、ある種の心理的・感覚的抵抗が依然として根強く残っているといえるのかもしれない。前著が『資本主義の限界と社会主義』ではなく『資本主義の限界とオルタナティブ』となっていることからその点は推察されるところであり、氏自身も第6章冒頭で、「人類の歴史的な進歩は、資本主義をのりこえてゆけるのかどうか、あきらかに見通しがたてにくくなっている。そこに生じている閉塞感をどう解きほぐしてゆくか」(242頁)と実直な見解を表明している。世代間の認識の相違やマルクス派内での学問的研究をめぐる温度差もあるのだろうが、水野和夫氏やハーヴェイらの近年の著書との関連とあわせ、資本主義の「なに」を「どう」のりこえていくのかも、実はこの点が始発点となるのではないか。

(2) 唯物史観の補整と社会主義

マルクスによる『資本論』の経済学によってその学問的根拠を与えられる唯物史観にもとづく科学的社会主義と関連し、生産力(人間と自然の関係)と生産関係(人間と人間の関係)をめぐる現代的な相互規定・制約関係をもふまえながら、氏は「唯物史観の内容を補足して、より豊かな内容にしてゆくことは、これからの社会主義のためにも必要な補整ではなかろうか」(257-8頁)という示唆的で興味深い問題提起をおこなっている。それによって、『資本論』の経済学—唯物史観—社会主義の3つの関係はどう変わりうるのか、それとも基本的な要諦自体は変わりえないのであろうか。マルクスとエンゲルスによる不朽の共著『共産党宣言』(1848年)では、「唯物史観を適用して、資本主義はのりこえられる必然性がある、とよびかけた」(255頁)が、そこにある「必然性」というものの根拠ともこの点は深く繋がっている。

本書の第2章「資本主義のダイナミズム」での議論も、資本主義市場経済に内在する質的な自己変革能力(周期的景気循環や恐慌を繰り返しながらもシステムの自己再生産にとどまらない動態的革新性をもつこと)を、「社会主義の

ダイナミズム」ーインセンティブ整合的でイノベーション（新商品や新技術の創造）を内生的に推進するシステムとしてのダイナミズムーとしていかに原理的に構築しうるのかという問題と表裏一体をなしている。大恐慌後の1930年代に資本主義諸国が深刻な危機に直面した事態と異なり、失業問題を回避しながら堅調に5カ年計画を推進していったソ連型社会主義の「成長」と「成果」を正当にみきわめながらも、それは総じて「資本主義のダイナミズム」に匹敵しうるものを欠き、政治経済システムにおいて発揮させることに失敗した。天然資源と労働力の枯渇に起因する、J・コルナイのいう「不足の経済」も次第に顕在化し、ソ連型システムの危機的「摩滅」状態からの抜本的改革は困難をきわめた。これまでも、そしてこれからの「社会主義の可能性と原理は、資本主義の原理の学問的考察により、その裏側に洞察されるべきところ」（263頁）であり、具体的で詳細な青写真を「意識的に回避しているように思われる」（同頁）マルクスの社会主義ー自由な個人のアソシエーションーの新たな潜勢力は、ソ連型社会主義の崩壊をうけて、「かえって不思議な魅力を増しているのではなからうか」（264頁）という見解には共感できるところであり、そしてまた、「資本主義をこえる社会主義の道はむしろひとつではないこと」（280-1頁）を認めあうことも現代的意義をより高めていると考えられよう。

(3) 21世紀型社会主義のコア

社会民主主義と社会主義の新たな協力関係の模索をはじめ、21世紀型社会主義はソ連型集権的計画経済を唯一普遍のモデルとみなす姿勢から解放され、市場経済を弾力的に活用する市場社会主義をふくむ多様な理論モデルが構想可能であることも共有されてよい（とりわけ本書では中国で実験されている社会主義市場経済の動向に着眼され、その意義が高く評価されている）。より具体的に本書が提起しているのは、ベーシックインカムの方政策的潜勢力、内的人間と外的自然の荒廃化に対抗するグリーン・リカバリー戦略など、広い意味でのグローバル地球環境問題への資本主義的企業優先の枠組みをこえた社会主義的ア

ブローチの有効性の意義、衰退する地域コミュニティ再生にむけて相互扶助的な信頼・協同関係を復権させるための社会的・文化的メディアとしての多様な地域通貨の理論的・実践的可能性、そして働く労働者の生活水準と職場の団結を連帯させる多元的な労働者組合運動（労働組合、労働者協同組合組織）などの諸潮流であり、21世紀型社会主義の新たな可能性の一環を担うそうした取り組みの経済思想・理論的意義ならびに政策的意義と含みを、総合的かつ有機的に問い直すことはきわめて重要な作業となるだろう。そうした試みの重要さに異論はないが、「21世紀型」社会主義は結局のところ、なにをもっともめざし実現しようとするものなのか、いまひとつ判然としない。21世紀型社会主義のメルクマールといってよいかもわからない。労働力商品化とその全組織化という資本主義経済の定義からひるがえって、それを止揚する社会を志向することは間違いない。国家主義・集権主義・官僚主義的でない民主的で分権的なグラスルーツからの変革運動を重要視し、そうしたオルタナティブの多様性・多元性もまた尊重されなければならない。「21世紀型」社会主義の新たな可能性はソ連再考をふくむ「20世紀型」社会主義の成果と限界をあらためて問い直すことと密接に関連しているわけである。

本書の第6章をめぐる一連の諸考察が、これからも中長期的視野にたって広く深く検討されるべき重要な問題群をなしていることはいうまでもないところであり、「社会主義」をテーマとするためには、おのずと「資本主義の基本的なしくみ」（第1章）を学問的に正確に把握しなければならない。総じて本書『入門 資本主義経済』という表題の守備範囲の広さにあらためて驚かされるのではないだろうか。

いささか余談になるが、わたくしは最初、本書の第4章から読み始めて第6章まで進み、そこから第1章に立ち戻ったときに、社会主義の新たな可能性を探究すべく資本主義の原理の意義がかえって鮮やかに実感できたように思えた。雄大な歴史的俯瞰と該博な知識を提供してくれる第3章「資本主義の発展

段階」は、独立して眺めてもきわめて読み応えに富んでいる。いくぶん率直な言い方をすれば、本書は必ずしも系統的に順序立てて読む必要はなく、読者の興味関心に即して「自由に読み進められる柔軟性」をもっていないか。これは、資本主義の原理に焦点化したテキスト『資本主義経済の理論』（1989年）の読み方との違いなのかもしれない。当該新書のもつ読み方の自由度については本稿冒頭ですでに示唆しておいた。それが学問的に正しくないというならば、自分なりの読み方をふくめ、本書を二回三回と読み直せばよからう。

4. 主流派経済学にはない資本主義論

(1) マルクス経済理論の優位性

本書の第1章「資本主義の基本的なしくみ」では、マルクス『資本論』体系にもとづく資本主義経済の原理的特質について簡明に概説されている。資本主義についての原理は、資本主義をのりこえようとする社会主義の可能性を考え直す場合にも欠かせない学問的基礎をなす。主流派の新古典派経済学において、貨幣と商品の交換の場である「市場」は理論前提としてはじめから存在するものと想定され、市場というしくみとその組織化の歴史的特性を明示的に扱っていない（「扱えない」というほうがより正確だろうか）。市場経済と資本主義経済を理論的に区分しえないのも、資本主義経済の特殊歴史性とその限界をあきらかにしうる理論装置自体を主流派経済学が有していないからだろう。氏が「新古典派ミクロ経済学にもマクロ経済学にも威信の低下、断片化、空洞化が感じられてならない」（『幻滅の資本主義』大月書店、2006年）ことをかつて端的に表明された、その根底に潜む「経済学批判」的な問題精神もそこに尽きているのではないか。新古典派経済学は、1) 貨幣と市場（貨幣にもとづく自律分散型市場）、2) 人間労働と剰余、3) 経済原則としての労働生産過程、といった重要な経済学上の論点を正確に理解するための資本主義市場（貨幣）経済理論を欠いている。

新自由主義とそれに理論的根拠を提供する新古典派マイクロ経済学の基本的な発想において、「個人主義的な取引に経済生活をゆだねてゆく資本主義の秩序が、人間に内在的な自由を認めあい、対等な人格を尊重しあう最も自然な社会の姿であるとするならば、多くの働く人びとにとっての生活上の格差、貧困、不安は人間社会の自然な帰結となる」(19頁) のであり、総じて「その根本的な解決は困難であるか、不合理な課題とみなされる」(同頁)。但し正確に言えば、新古典派マイクロ経済学それ自体は「新自由主義的ではない」 のであり、むしろ広範囲に及ぶ「市場の失敗」を理論的に認識し、政府の役割をふくむ多様な制度設計のあり方について、たとえばゲーム理論を積極的に援用して新たな知見を提供してきている(ジョン・マクミラン『市場を創るーバザールからネット取引まで』NTT出版、2007年)。既存の新古典派体系を内部から革新させる新たな「拡張」新古典派の経済理論は、人間社会としての経済全体へのトータルな洞察、そして人類史を総括しうる社会科学・歴史科学としての経済学の潜勢力をどう発揮していくのか。むしろ個別具体的で実利的な経済学の問題設定により重きを置く傾向が顕著にもなっていないであろうか。逆に言えば、マルクス経済学の基礎理論は主流派経済学のそうした狭い発想と課題設定を批判的に突破し、「資本主義の原理と現実のより正確な理解」(同頁)を提供しうるいわば唯一の学問認識の体系ともいえる。繰り返し問われ続ける「経済学の危機」の内実をふくめ、主流派経済学の意義・限界とマルクス経済学の理論的優位性についても実は古くて新しい問題といえないだろうか。

(2) 主流派にはない3つの側面

上述しておいたように、わたくし自身は次の3つの側面にとりわけ関心を惹かれた(第2章「資本主義のダイナミズム」や第3章「資本主義の発展段階」にも興味深い論点や内容がたぶんに含まれている)。

①スミスとリカードの古典派経済学に通底する貨幣像を理論的に拡充・深化さ

せたマルクスの経済学は、1930年代に貨幣的市場経済論としてのマクロ経済学を構築したケインズにさきだって、貨幣をめぐる重商主義学説（富の蓄蔵手段としての貨幣）を再評価し、「マネタリーな理論経済学の体系」（25頁）とみなすことができる。主流派経済学において、マルクス経済学の理論体系を概して労働価値説ないしは剰余価値論としてのみ捉える偏向があるのではないか。こうした点はとりわけ強調されてよからう。そしてまた、ケインズ学派やポスト・ケインズ学派のいう資本主義経済における貨幣・金融の根源的不安定性という視角は共有しながらも、それらが貨幣の保有動機（流動性選好）をふくめ、総じて諸個人の将来への期待や予測といった主観的・心理的要因に経済分析の重心を置くのに対し、マルクス派が貨幣・金融の諸機能やそれを背後で支える経済的下部構造といった客観的側面をより重要視する点で両学派は異なっている。

②あらゆる人間社会に通じうる経済生活の原則的基盤としての労働・生産過程は、内的自然としての人間が外的自然とのあいだでおこなう物質代謝、そしてその相互連関の作用を繰り返し再生産させながら経済活動を営み継続していくことの意義をあきらかにする。日本で急速に進展する超少子高齢化の進路は、こうした経済原則それ自体の維持を大きく毀損させる重大な社会経済的危機の一環をなすという点は、本書でつとに強調されている。そしてまた、マルクスの労働・生産過程論の意義から、構想と実行の二面を特徴とする人間労働の「異なる有用労働も社会的な経済生活の基本を支える作業においては、人間的な労働能力の広い互換性や転換可能性にもとづき、同質的・抽象的な人間労働の社会的貢献をたがいに構成しているとみてよい」（28頁）という見識を導き出していく。したがって階級諸関係を基礎とする資本主義的市場経済において、剰余価値としての利潤の源泉である剰余労働を資本がいかに取得し、働く人びとの労働の成果の社会的配分帰属関係をあきらかにする分析的枠組みである客観価値論としての労働価値説は、深い人間主義的

な問題関心をもとめない、新古典派や新リカード派の断定するようにつけて「余計で不要な廻り道」ではない。むしろワルラスの一般均衡理論が描く完全競争モデルこそ「無利潤論」であり、利潤決定論を欠いている。氏が指摘するように、経済学の理論的な課題を市場での均衡価格決定論に集約する狭い見方の帰結ではないか。社会科学としての経済学が取り組むべき課題とその射程（ヴィジョンと方法）という根本が問われている。

- ③本書は、近代資本主義の理念（自由、平等、人権ないしは友愛）がもつ魅力と含意の広さに着眼しながら、それは「近代以降の市場経済社会のみならず、資本主義市場経済のしくみを未来にかけて統御し、あるいはのりこえてゆこうとする場合にも、指導的な役割を果たしうる広がりをもっている」（17頁）と表明する。資本主義経済の原理の骨格をなすところの商品・貨幣や市場、人間労働・剰余、経済原則などの観点は、社会主義経済の理論を考え直す際にもキーとなる。そうした氏の諸考察はかつての『現代の社会主義』（講談社学術文庫、1992年）や『市場経済と社会主義』（平凡社、1995年）などにすでに詳しいが、第1章「資本主義の基本的なしくみ」は、その理論内容を転じて、「社会主義の基本的なしくみ」として意識的に読み直すこともできるだろう。第6章との連動はやはり興味深いところだ。

最後にもう1点だけ補足的に指摘しておきたい。前著『経済学からなにを学ぶか—その500年の歩み』においても率直な感慨として述べられていたように⁶、本書でも、資本主義市場経済の根底をなす剰余価値生産の原理が、スミス

6 そこでの氏の文章をあえて以下に引用しておくこととしよう。すなわち、「資本主義的な生産を存立させている剰余価値生産の秘密が、その秩序を自然主義的に理想化し擁護する古典派経済学や新古典派経済学では、理論的に解きあかされず、むしろ資本主義のしくみに批判的な考察をすすめたマルクスによって、はじめてその合理的存立の原理が解明されたことは、経済学思想と理論の歩みのなかで、なんど考えても興味が尽きないところである」（伊藤 [2015] 204-5頁）。

とりカードの古典派経済学では十分にあきらかにされず、「資本主義の特殊な歴史性と内的限界に関心をむけ、むしろ反資本主義の論拠を探っていたマルクスによってはじめて解明されたことは、なんど考えても興味ある逆説をなしている」(38頁)と述べられている。それを「興味ある逆説」として「なんども考え直している」マルクス経済学の理論家はどれくらい他にいるのか。これについての文章を(脚注6で引用した)上記の著書でも読んで、つねに新鮮な気概で学問に接する姿勢をあらためて強く教示された実感している。

5. 経済学史の未来にむけて

当該新書は「経済学史」の書ではないが(第1章や第3章などは資本主義をめぐる経済学説史として読むこともできよう)、社会科学としての〈経済学〉がその誕生の当初から〈資本主義〉を重要な考察対象としてきた経緯からすれば、〈資本主義〉と〈経済学〉とは密接不可分の関係にあり、経済学の歴史は〈資本主義〉をめぐる競合的諸学派による経済理論・思想、そして政策的・制度的処方箋についての格闘ないしは論争の歴史とあってよいかもしれない。「資本主義」をめぐる当該新書をつうじて、われわれは「経済学史の未来」をどう展望できるか。わたくし自身は現代的に「経済学史」という学問分野はむしろその重要性を高め増していると考えている。経済学の思想と理論はけっしてひとつではありえない⁷。主流派の新古典派経済学を相対化し、競合的学派の諸相をふまえた経済学の「多様性」論を論じ直すことがとりわけ肝要であろう。「経済学史」や「社会思想史」ないしはそれらと関連するところの「政治経済学/社会経済学」といった分野がなければ、経済学はマイクロ・マクロでよい、またその応用経済学のみでいいということになりかねない。現在そういう風潮はむ

7 このような関心を共有し、古代ギリシャの哲学者らが挑んだ問題群から現代経済学までの多様な諸潮流をきわめて明快に概観したものとして、『経済学大図鑑』の著者のひとりであるナイアル・キシテイニーの『若い読者のための経済学史』(すばる舎、2018年)を推奨したい。本書原題はA Little History of Economicsである。

しろ強まってきている。

本書に先立って刊行された『経済学からなにを学ぶか—その500年の歩み』(平凡社新書, 2015年)には、次のような著者の学問的信念が表明されている。すなわち、「資本主義経済がもたらしている深刻な不安定性と格差の拡大, 人間と自然への破壊的な荒廃作用の限界を, その根源から再考し, これからの社会経済のオルタナティブを検討してみたいという観点にたつと, マルクスの思想と理論にたちもどらざるをえないであろう。それが世界の良識でもある」(前掲書, 185頁)。市場経済と資本主義経済を理論的に区分しえない主流派経済学の諸理論では, 資本主義市場経済がもつ特殊歴史性とその限界をけっしてあきらかにすることはできない。社会科学としての経済学によって唯物史観に学問的根拠を与えようとしたのであり, その逆ではない。経済学方法論としても, マルクスの経済学は他学派にない学問的な優位性と魅力を兼ね備えているとあってよい。とはいえ, マルクス派の経済学と新古典派経済学およびその内的限界を突破して独自の理論体系を構築したマクロのケインズ派経済学との関係など, 「経済学史の未来」の展望には競合的諸学派のあいだに伏在する難しい錯綜した異同がある。

別の箇所でも氏は次のように述べている。「近代以降の資本主義の発展とそれをのりこえようとした社会主義との双方にわたり, 歴史の多重危機が深まっているなかで, むしろ経済学全体に重大な試練と危機が訪れているのであり, 両学派の競合関係を, これにどう活かせるかが問われているのではなかろうか」(同上書, 130-1頁)。やや専門的観点からいえば, 両学派の理論的・思想的関連は, たとえば価値論・転形問題論争や, 「経済学史における欠落」ともいいうる価値論論争と社会主義経済計算論争との立体的運動性をあらためて焦点化することで学問的視野が新たに切り拓かれていく可能性はあろう。新古典派ミクロ経済学におけるワルラスの一般均衡学派と社会主義の理念との接合可能性が許容されていることもふまえ, 「経済学の思想と理論の関係の多様性と弾力性をめぐり, 注目に値するところであろう」(同上書, 147頁)とも指摘されて

いる。新古典派経済学の歩みにおいて、オーストリア学派のハイエク的な新自由主義とそれにつながる市場原理主義的な思想と理論とは異なる、マーシャルらケンブリッジ学派の社会民主主義的経済学や広く社会主義に活用しうる学問的洞察も培われてきており、著者は一概に「新古典派」拒否の姿勢をけっしてとらず、経済学の広い歴史のなかでむしろ学派間の競合性と共創性を尊重してきている。経済理論・思想の「多様性」や「弾力性」という側面をこれからどう活かしていけるであろうか、またどう活かしていくべきであろうか。

経済学史の研究者はこうした問題関心をあまり明確に共有していないのかもしれない。みずからが専門として扱う単独の経済学者とその学派については関心をもち詳しいが、多様な諸学派の競合性や先にふれた経済学の危機状況などについて、そもそもトータルな理解を探究していないのかもしれない（たとえば宮崎義一『近代経済学の史的展開』（1967年）やモーリス・ドップ『価値と分配の理論』（1973年）といったかつての著作には、そうした問題精神と作風が本書全体を貫くモチーフになっていた）。それは「理論」研究分野に限らず、「学説史」研究の細分化と専門化が進展してきている証左であろうが、それでは「経済学史」研究はこれまで以上に局所化・断片化していき、多様な政治経済的問題や社会現象に対しての積極的関与から疎遠になっていく危険性もあるに違いない。これまで以上に強く求められていくのは、経済学史という学問分野、そしてそれを専門とする経済学史研究者の「守備範囲」をどう再考していけるかという点であろう。「過去を観る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本当に掴めない」（水野和夫氏の共著『コレクションと資本主義—「美術と蒐集」を知らば経済の核心がわかる』角川新書、2017年）ならば、経済学史の役割は廃れるどころかむしろ欠かせない意義を担っているはずである。「経済学史の未来」は「資本主義の未来」と平行な関係にある広く深い問題である。上記新書の副題「その500年の歩み」はそのことを端的に告げていよう。

6. 経済学を学ぶ若い世代へ

著者の伊藤氏は、高校時代にイギリスの著名な数学者・哲学者であったパーランド・ラッセルの講演をまとめたパンフレット『原子力時代に生きて (Living in an Atomic Age)』を英語で読んで感銘と衝撃をうけ、工学などの自然科学系から社会科学を大学で専攻すべく志望を変更されたそうである（『世界経済の中の日本—ポスト・フォードイズムの時代』社会評論社、1988年）⁸。それもたまたま英語の受験勉強のつもりで読んだ、ということだった。ただ、そういうなにかのきっかけというものが、ときに人生の進路を決めることがある。

本書『入門 資本主義経済』は、経済学部の初年度や他学部の学生に向けた「入門的」経済学のテキストとして活かされることを望まれている。そしてまたおそらくは、実社会で働く多くの世代の人びとの「再入門的」テキストとして読まれることも、学問としての経済学が社会科学である以上、期待されるであろう。氏自身、半世紀に及んで国内外の大学で教鞭をとられてきた。今現在、大学で経済学を学んでいる学部学生やこれから大学で経済学を勉強してみたいと考えている「若い世代」にどんなメッセージを持たれているのだろうか、そしてまたそうした世代にどのようなことを期待されるのであろうか⁹。

ケインズ左派のジョン・ロビンソンが1970年代初頭に「経済学の第二の危

8 伊藤 [1999] と Itoh [2000] にも同様の記述がある。「経済学—教授と学生Ⅱ：マルクス経済学を学んで」（『経済セミナー』1974年4月号, No.229, 36-50頁）という伊藤誠先生（当時助教授）と伊藤ゼミで学んだ学部学生4人による対談記録にもそのことを指摘する記述がある。当該対談における、マルクス経済学や現代資本主義をめぐる「教授と学生」の実直な意見交換はなかなか興味深く、その時代の学問状況を知るための良き手引きとなるであろう。くわえて長らく深い親交のあったアメリカのポール・スウィージーがマルクス経済学をいわば「独学 (self-education)」で修得していったという伊藤氏の問いへの返答もとりわけ印象的である（伊藤 [1999]）。

9 氏に限らず、学問上の多くの先達の肉声を聞くことも有意義であろう。『経済セミナー』増刊号の特集「経済学者が贈る未来への羅針盤」（2018年3月）に所収された一連の文章を参照。吉川洋，神野直彦の両氏のメッセージがとりわけ示唆に富む。

機」(1971年)を表明し、識者によっては「経済学の第三の危機」も指摘されている(神野直彦他『経済の危機と学問の危機』岩波書店、2004年)。著者によるかつての著作から最近の論稿、本書などをあらためて読み直してみても、「経済学の危機」ということが絶えず繰り返し強調されている。いわば経済学はずっと危機的状況にあり、そこから一度たりとも抜け出ていない、とみることもできる。深刻な「多重危機」や「重層的危機」といわれると余計に気が滅入ってしまう。それでは経済学を学んでいてもあまり楽しくないのではないか。これからの若い世代が、学問としての経済学を学ぶ積極的な動機づけをなかなかもちえないことが一教員としてはいささか気がかりである。

学問—それは端的に言って「問いを学ぶ」、「問いから学ぶ」営為である—はたしかに「難しい」ものだが、同時にまた「楽しい」ものだ。その「楽しい」そして「面白い」という感覚をもつには、われわれ大学教員が講義や演習などをつうじて学生諸氏に知的関心をもってもらえるよう努力をすることはしごく当然であろう(余談だが、20年以上前の1996年4月以降、東京大学から慶大に非常勤で教えに来られた伊藤氏の講義をわたしは毎回楽しみにしていたことが今更ながらに想起される。氏が担当されていた「社会主義経済論」という講義は、慶應ではその当時しばらく担当者がおらず、氏の『現代の社会主義』1992年や『市場経済と社会主義』1995年、を藪にいれて就活していた記憶がある)。しかしそこから先は、学生諸君が自発的にテーマを「発見」していくプロセスが欠かせない。問題発見は学問の出発点といってよいが、それが難しいのもまた事実である。スマホなどICTの発展と普及が加速化するなか、たんなる情報収集にとどまらない「知(識)」としてのストックをピン止めする継続的努力が強く求められている。伊藤氏は「資本主義」について学び考えることにワクワクし、興味につきないという。そういう大きく魅力的なテーマを見つけることによってこそ、経済学という学問への深い内面からの楽しさと興味が湧くに違いない。

著者のこれまでの多面的な学問成果・動向においてわたくしがとくに強い知

的関心を抱くのは、1970年代以降のいわゆるマルクス・ルネッサンスを契機とする欧米マルクス派との積極的交流をつうじ、欧米の経済学者に根強く備わっている鋭敏な現実感覚や旺盛な実践精神に深く共感し、それを学問研究のいわば原動力にしている点だ（伊藤誠『資本論研究の世界』新評論、1977年）。他学派との意見交換にもとづく学問的摂取という点もけっして見落とせない。宇野理論とは異なるスタンスからマルクス経済学の研究を推進されていた、（故）置塩信雄氏との共著『経済理論と現代資本主義』（岩波書店、1987年）も、そうした試みを象徴する学術成果にほかならない¹⁰。「社会」科学への主体的関心は本来的にはそういうところから生じうるのだろう。そうした広く深い学問精神は、ミクロ・マクロ経済学や計量経済学のようなコースワークのみでは必ずしも十分ではない。「資本主義とはなにか、それはどうなっていくのか」、そもそも「経済学とはどのような学問なのか」といった根本的な問いを常に意識することの重要性がより増している。当該新書の主題「資本主義」について考え直すこと自体が経済学教育全体のなかで希薄化してきているのではなからうか。わたくしが本学にて現在担当している「経済学史」や「社会思想史」といった講義科目の役割もこうした〈大きな問題〉への自覚化という側面がとくに大きい（先の『経済学からなにを学ぶか』そのものともいえよう）。前節とあわせ、社会科学としての経済学のゆくえも、資本主義のゆくえと同様に問い直され続け、現在はそのこと自体の意義が高まっている時代なのである。

10 伊藤誠と（故）置塩信雄の両氏による対談「資本主義認識の射程」（『思想』1986年4月号、1-26頁）も参照。30年以上も前の対談だが、むしろその討論内容は現代の世界史的情况を考え直すうえできわめて鮮やかな輝きを増している。幅広い世代にぜひ一読を薦めたい。当該対談は、のちの共著『経済理論と現代資本主義—ノート交換による討論』（岩波書店、1987年）の予備的作業としての役割を担っていた。

7. おわりに

以上、伊藤氏の原著にもとづく主要論点と若干の疑問点などを、余談も交えながら詳しく述べてきた。内容面での重複が散見されるところではあるが、それについてはご容赦願いたい。わたくし自身は、『入門 資本主義経済』を実際に講義系科目などで活用しながら、本書をつうじて得た見識や洞察を学生に伝えていくと同時に、「資本主義」や「社会主義」という壮大なテーマについて、今後も継続的に思索していきたいとの思いを強くしたというのが率直な感慨である。現代の文脈での当該テーマをめぐる多様な問題状況とあわせ、経済学の古典再読など学説史研究の意義と役割についても考察を重ねていきたい。

本書の主要論点のひとつでもある資本主義の「限界/終焉」論はたんなる一種のブームなのか、それとも専門的研究者をこえて広く真剣な検討を要請され続ける社会科学的なテーマとなるのか否かについても、あわせて注視していきたい。本書の精神と内容は、ケンブリッジのマルクス経済学の理論家モーリス・ドップ（1900-1976）やアメリカのポール・スウィージー（1910-2004）の多面的な研究領域を想起させるようにわたくしには汲み取れ（塚本 [2018]）、社会科学としての経済学の奥深さと魅力をあらためて強く実感できたと考えている。幅広い世代に伊藤誠氏の当該新書が届くことを切に願い、本稿を締めたい。

参考文献

- 伊藤誠 [1977] 『資本論研究の世界』新評論。
伊藤誠 [1988] 『世界経済の中の日本—ポスト・フォードイズムの時代』社会評論社。
伊藤誠 [1989] 『資本主義経済の理論』岩波書店。
伊藤誠 [1995] 『市場経済と社会主義』平凡社。
伊藤誠 [1999] 『『資本論』の経済学に惹かれて』『経済セミナー』12月号、6-7頁。
伊藤誠 [2006] 『幻滅の資本主義』大月書店。
伊藤誠 [2009] 『サブプライムから世界恐慌へ—新自由主義の終焉とこれからの世界』青土社。

資本主義とそのオルタナティブをめぐる主要論点

- 伊藤誠 [2013] 『日本経済はなぜ衰退したのかー「再生」への道を探る』 平凡社新書。
- 伊藤誠 [2015] 『経済学からなにを学ぶかーその500年の歩み』 平凡社新書。
- 伊藤誠 [2016] 『マルクス経済学の方法と現代世界』 桜井書店。
- 伊藤誠 [2017] 『資本主義の限界とオルタナティブ』 岩波書店。
- 伊藤誠・置塩信雄 [1987] 『経済理論と現代資本主義』 岩波書店。
- 伊藤誠・金子勝・大西広・水野和夫 [2015] 「鼎談 資本主義の現在と明日の経済像」
『季論21』 30号記念増大号所収, 2015年10月20日, 本の泉社。
- 斉藤日出治 [2018] 『グローバル資本主義の破局にどう立ち向かうかー市場から連帯へ』
河合ブックレット40。
- 塚本恭章 [2017] 「資本主義と人間をめぐる経済思想史ー最近の著書5冊の紹介と批評からー」
愛知大学『経済論集』(愛知大学経済学会) 第204・205合併号, 23-58頁。
- 塚本恭章 [2018] 「モーリス・ドブーー欧米マルクス派の政治経済学ー」
愛知大学『経済論集』(愛知大学経済学会) 第206号, 1-34頁。
- 西部忠 [2011] 『資本主義はどこへ向かうのかー内部化する市場と自由投資主義』 NHK 出版。
- 西部忠 [2017] 「資本主義に代わるオルタナティブ」ピープルズ・プラン= People's Plan (77)
101-119頁。
- 水野和夫 [2014] 『資本主義の終焉と歴史の危機』 集英社新書。
- 水野和夫 [2017] 『閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済』 集英社新書。
- 水野和夫・山本豊津 [2017] 『コレクシオンと資本主義ー「美術と蒐集」を知らば経済の核心
がわかる』 角川新書。
- 森岡孝二 [2015] 『雇用身分社会』 岩波新書。
- 若森章孝・植村邦彦 [2017] 『壊れゆく資本主義をどう生きるかー人種・国民・階級2.0』
唯学書房。
- Itoh, M. [2000] “Makoto Itoh (born 1936)” in Arestes, P and Sawyer, M (ed.) [2000]
A Bibliographical Dictionary of Dissenting Economists, Edward Elgar, pp.319-326.

